【取扱い厳重注意】

平成２４年４月３日

聴　取　結　果　書

東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証委員会事務局
局　員　　三田　浩平

平成２４年４月３日、東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証のため、関係者から聴取した結果は、下記のとおりである。

記

第１　被聴取者、聴取日時、聴取場所、聴取者等

１　被聴取者

衆議院議員　菅　直人（事故当時は内閣総理大臣）

２　聴取日時

平成２４年４月３日午後１時００分から同日午後５時３０分頃まで
（休憩あり。午後３時００分から午後３時１５分まで）

３　聴取場所

三菱総合研究所ビル２階カンファレンスルーム

４　聴取者

畑村委員長、柳田委員長代理、高須委員、髙野委員、小川事務局長、高嶋参事官、加藤参事官補佐、飯崎参事官補佐、三田主査、仁保主査

５　ＩＣレコーダーによる録音の有無等

■　あり
□　なし

第２　聴取内容

事故対応全般について

第３　特記事項

■下線部については、先方から、特に強い非開示の要望があった。
■平成２４年５月１８日、被聴取者から聴取内容の訂正申立てがあった。
・P.1　21行目：「法改正」を「法整備」に改める。
・P.1　30行目：「原子力規制委員会」を「原子力規制機関」に改める。
・P.2　20行目：「予算委員会」を「決算委員会」に改める。
・P.13　18行目：「その辺りから話は非常に、」の後に「分かりやすくなりました。」を加える。
・P.16　25行目：「一般の政治家にこの範疇」を「一般の政治家が知って

いる範疇」に改める。

・P.25　33行目：「だから、動かなくなりますよ」を削除する。

・P.30　23行目：「東電自身からとられた」を「東電自身から聞かれた」に改める。

・P.32　1行目：「私が来たのは」を「私には」に改める。

・P.34　13行目：「ふさぎ」を「押さえ」に改める。

・P.40　14行目：「20名から17名になるわけですから、このころしましたから」を「20名から17名に、このころしましたから」に改める。

・P.50　16行目：「意外とききませんから」を「意外と修正がききませんから」に改める。

・P.51　10行目：「応答をお願いして」を「検討をお願いして」に改める。

・P.52　20行目：「前後ある原子力の専門家ではない参与が」を「その前後に、ある原子力の専門家ではない参与が」に改める。

・P.52　21行目：「党部長が、そのような人が、私が言ったのではなくて、その中で言った話なのですが」を「そのような人が、私が言ったのではなくて、その中で、その人が言った話なのですが」に改める。

以　上

【取扱い厳重注意】

○菅前総理　本当にどうも大変御苦労様です。

私も事故当時、そして今日まで、いろいろな形で事故を私なりにも検証なり、いろいろ考えてまいりました。そういう中で、やはり第1の大きな私の認識は、特に今回の原子力事故、福島原発事故については、事故の起きた3月11日以前に、その大半の言わば原因があったというのが私の経験した中での認識であります。

余り事細かには申し上げませんが、象徴的に言えば、例えば福島原発第一サイトは、もともとは海から35mの崖、高台だったわけですが、それを海から10mのところまで土を切って、そして置いていると。当時の東電の記録を見ますと、水をくみ上げたりする上で便利だったということ、先見の明があったと、そこまで書いてありますが、しかし、歴史的に見れば、あの地域は50年や100年に一度は大きな津波が来ているところでありまして、そういうことについての考慮が当時全くなされていなかったのかと考えると、そういった点が象徴的にも言えると思っております。

また、原子力行政についても、時代時代によって変化はありますけれども、例えば原子力安全・保安院というものは、どちらかと言えば原子力を推進している経産省の中にあったと。これもIAEAなどから指摘が以前から何度もありながら、そういう状態をそのままにしていたと。それがいろんな形で安全性を軽視することにつながったという事例は、これもいろいろな報道などを見ると、たくさんあったように思えてなりません。

また、直接的な3.11の時点におけるいろいろな法制度なり、直接の危機対応の準備でありますけれども、例えばこれも特徴的な点で言えば、オフサイトセンターというものを置いて、そこが基本的に指揮をとる。これは多分、東海村の臨界事故のときの教訓を踏まえて行われた法改正だったと思います。ただ、現実には、地震と原子力事故が同時に起きた中で、オフサイトセンターが全くと言っていいほど物理的にも人が集まるといったような性格が機能しなかった。そういった意味で、この法制やそういう制度的な準備も極めて不十分というよりは、今回の事故においては、対応ができていなかった。

こういった問題を含めて、それらのことは、ほぼすべて3.11以前の備えが不十分であったと。簡単に言えば、全電源喪失を一切想定しない、否定した中で行われていたところに大きな理由があったと思っております。

その上で、3.11からのことについては、また今日も本当にいろいろな御質問もあるかと思いますが、先ほど委員長からも言われましたように、やはりこのことが今後どのような形で日本の原子力行政を変えていくのか。今、原子力規制委員会についてもいろいろ話は進んでおりますが、これについても後ほど私なりの見方も申し上げていきたいと思います。

更には、もっと本質的に、エネルギー源としての原子力というものを我が国が今後どのように受け止め、どのように扱っていくのか。更には、国際的にも、このままいくと、福島原発事故があったにもかかわらず、新興国を含めて、かなり原発新設の動きが進んでおります。輸出入の問題も含めて、国際的に何らかのルールが必要ではないかと私は考えておりまして、今回の事故調査の中で、そういった広い観点についても何らかの示唆をいた

だければありがたいと思っております。

また、委員長がおっしゃいました放出された放射能被害の問題。これは本当に深刻であると同時に、非常に難しい場面がたくさんありました。どちらかといえば、この部分は、当時、官房長官を中心に対応をしてもらっているものが多いんですけれども、今後長く残る問題として、この問題についてもしっかりした検証が私も必要だと思っております。

以上、若干の私なりの見方の概略を申し上げさせていただきました。

○質問者　今の話の点につきましては、また掘り下げた質問が委員の方からあると思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは、まず、質問事項に沿いまして、順番に3月11日以降の状況につきましてお伺いできればと思います。時間も長くなりますので、背広をとっていただいて、リラックスした御姿勢をおとりいただければと思います。お願いします。

まず1番の初動体制、初動対応のところでございますけれども、発災後の時系列的な動きのところからお話をお伺いさせていただければと思います。

3月11日の14時46分に地震が発生いたしまして、その後、緊急事態発生宣言だとかの動きになるわけでございますけれども、まず、初動のところについてはどんな動きなり、あるいはどんな御認識があったのかということについてお伺いできればと思っております。

まず、地震が発生しましてから、海江田大臣が原災の関係で緊急事態宣言を上申されたのが11日の17時42分ごろと聞いておりますけれども、そのころまでの動きにつきまして御説明いただければと思います。

○菅前総理　震災が発生した14時46分には、私は参議院の予算委員会で答弁席に座っておりました。大きな揺れが一旦収まって、委員長から休憩が宣告されまして、官邸に戻り、たしかその足で地下の危機管理センターに入りました。

まずは、地震、津波についての緊急災害対策本部を、私の記憶によれば15時14分に設置をし、15時37分には第1回の地震、津波についての緊急災害対策本部を開催いたしました。

原発については、当初はいわゆる緊急停止ができたということを伝えられておりましたが、その後、全交流電源が喪失をしたという知らせが経産大臣にやってきて、更に非常用炉心冷却装置も注水不能という、いわゆる15条事象が起きたと。これは経産大臣のところにそういう報告が来たのは16時45分と聞いております。

官邸の方では、その少し前の16時36分には、東京電力福島第一原発における事故に関する官邸対策室を設置いたしておりました。その後、保安院等から説明がありましたが、この15条問題について説明があったのは、17時42分に経産大臣の方から私に対して、原災法15条事象等の状況に関する必要な報告が上がってまいりました。原子力緊急事態宣言にかかる上申書の提出をいただいたわけであります。

この間、短時間でありますけれども、与野党党首会談に5分ほど出席をして退席をいたしまして、19時3分に原子力緊急事態宣言を発令し、原子力災害対策本部を設置し、そし

て第１回の原子力災害対策本部を開催する。

これがこれまでの経緯だと認識しております。

○質問者　今のお話の流れの中で、海江田大臣が 17 時 42 分に来る前に、どこかの時点で福島第一原発について全交流電源の喪失とか、冷却機能の喪失をしたという報告をお受けになっていると思うんですが、それはどういう状況でお聞きになったかというのは御記憶はございますでしょうか。

○菅前総理　17 時ごろに保安院と東電関係者ですから、武黒フェローから状況説明を聞いたというふうに記録がなされております。

この段階で聞いた中身については、15 条については 16 時 45 分ですので、そのこと自体の通報があったということは、まだその時点では伝えられていなかったと認識しています。

○質問者　保安院は寺坂院長をお呼びになって、寺坂院長からお話をお聞きになったということでよろしゅうございますか。

○菅前総理　最初は固有名詞が余りわからなかったですから、責任者に来てくださいということで、保安院、原子力安全委員会、東電、これが当事者を含めた３者でありますので、基本的には常に責任ある立場にあるそれぞれの代表が来て、そして経産大臣とか、直後は官房長官とかも同席する機会が多かったですから、話を聞いていました。

○質問者　最初に保安院を呼んだときの福島第一原発についての状況とか、どんな状況なのかということについては、どんな御認識を持たれていましたでしょうか。

○菅前総理　今、言いましたように、多分最初は保安院の寺坂院長が来られたんだと思いますが、その場でどういう表現をされたかは、具体的な言葉はよく覚えていません。ただ、非常に率直に申し上げて、寺坂院長の説明は内容を聞いてもよくわからなかったんです。ですから、そういう意味では、必ずしも技術的な状況がわかった上での説明では、少なくとも私にはそういうふうに受け止められませんでした。理解がよくできていないという感じがしました。

○質問者　総理としては、どういう点を説明してほしいとか、どういう点を知りたいという御関心があったのでしょうか。

○菅前総理　それは現在の状況ですね。炉でいえば、つまりは全電源が喪失していると。冷却機能が停止していると。それがどういうことを意味するのか。それが回復できるのかどうか、あえて言えば、その原因はどこなのかとか、それを回復するにはどうしたらいいのかとか、あるいは見通しはどうなっているとか、そういう原因なり、今の状況なり、今後の見通しなり、当然それを専門家だと思っていましたから、つまり、原子力安全・保安院というのは、行政の中では最もまさに安全・保安をする当事者ですから、その責任者がどういう状況認識をして、どういう見通しを持っているのか、そういうことを聞かせてもらいたいと思った。

一般の平時の他の行政部門では、逆に説明に来る方が、この場合もそうですが、大臣や総理よりも専門家ですから、どちらかと言えば、聞かなくてもちゃんとそういうことはき

ちんと説明があるわけですから、当然そういう説明があるだろうと思って聞いていたわけですが、それが十分な説明になっていなかったんですね。

○質問者　そういうのが十分でなかったので、東電の担当者とか、東電の関係者をお呼びになったという状況ですか。

○菅前総理　そうではありません。東電は事業者ですから、実際に炉の運転をしているのは東電そのものですから、当然、事業者である東電からも直接というか、東電のきちんと説明できる人が来て説明してくれと。原子力安全委員会は、勿論きちんと法律で位置づけられた何らかがあったときには助言をするとか、これも原子力の専門家ですから、それぞれ性格は違うけれども、こちらが不十分だからだれかを呼んだということではありません。この３者は、常に私にとっては必要な、あるいは制度的にも必要なそれぞれの立場での責任ある立場という認識で呼びました。

○質問者　わかりました。

東電の担当者は、多分武黒フェローとか数名の方が来られたと思うんですけれども、説明の内容についてはいかがですか。わかったとか、わかりにくい説明だったのか、なかなか納得のできる説明がなかったとか、どんな印象をお持ちになったでしょうか。

○菅前総理　これは最初のときだけの印象がどうだったかと言われるのは、なかなか瞬間ですから、その後、ずっとかなりいろいろな経緯が続くわけですけれども、東電の元の技術担当の副社長ということを後で聞きましたが、少なくとも、炉のこととか、そういうことについては、そういう意味では納得がいきました。ただ、そのときの事態がどういう状況にあるかというのは、これはまた残念ながら、必ずしも十分な情報を持っておられなかったのではないでしょうか。さっきの寺坂さんとはちょっと意味が違います。

○質問者　リアルタイムの状況なり、現場の状況がわかっていないということですか。

○菅前総理　情報を持っておられなかったのではないでしょうか。だから、いろいろ問い合わせをされていました。

寺坂さんの場合は、その状況の前に、簡単に言えば、炉とか何とかのことについての基礎的な認識が必ずしも十分ではなかったので、私も最初にそういうふうに感じたのではなくて、何回聞いてもよく理解できないものですから、どういうことなんですかとつい聞いてしまったんですね。いろいろ報道で出ていますけれども、専門家ですかと聞いたら、そうではないと言われたので、まさかこの原子力安全・保安院の事業を対応する責任者が原子力について専門的な知識を持たない人がなっているというのは、勿論、当時は私の部下でありますから、そういう意味では、私にも行政の在り方としては、広い意味では責任があるのですが、やはり率直に言ってびっくりしましたよ。

○質問者　なかなかその十分な説明も得られない中で、海江田大臣が緊急事態宣言の必要がありますということで来られたという順番になりますでしょうか。

○菅前総理　順番というのか何というのか、もともと 15 時 37 分に全交流電源が喪失していますし、15 条の通報が 16 時 36 分に経産大臣に出されていますから、だから、それを受

けた経産大臣、つまりは、その経産大臣の下にある原子力安全・保安院がそれを受けて、当然ながら、総理の私は本部長ですから、本部長になることになりますから、私のところに伝えるというのは、ごく自然なのではないでしょうか。それを受けたとか受けていないというよりも、順番は多分そういう順番ではないでしょうか。

○質問者　わかりました。

15条通報の事態が発生して、緊急事態宣言の発出の必要がありますということは、海江田大臣から上申があったわけですけれども、そのときの状況といいますか、海江田大臣の説明はどんな感じだったのでしょうか。

○菅前総理　今の御質問の意味がちょっとあれなんですが、全部同じことですね。つまり、私のところに来られたのは、多少の細かい何時にどうなったというそこまでの私自身の記憶が、時間単位、分単位までありませんので、後でしっかりフォローしてみたところでは、17時ごろ一旦保安院などからそろそろ説明を受けているけれども、その段階では、まだ15条のことの説明ではなかったと。

17時42分に経産大臣から15条についての説明があって、そして、上申書が提出されたという認識です。

○質問者　海江田大臣等からお話を聞きますと、緊急事態宣言の必要について説明したんだけれども、すぐには了解をいただけなくて、そのうちに与野党党首会談の方に行かれて、その後、戻ってこられてから了承をいただいたと聞いておりますが、即座に了承するということにならなかったのは、どういういきさつからだったかというのは御記憶はありますでしょうか。

○菅前総理　私の認識では、これは15条事象が起きれば、緊急事態宣言を発令する、あるいは本部を設置するというのは必須のことだと理解しています。ですから、別に私が躊躇したというよりも、説明の場合によったら、途中に与党党首会談が予定されていましたので、短時間ですけれども、そこに行って、5分で戻ってきていますが、そういう後に更に聞いて対応したと。そういうふうに何か理由があって、それを遅らせる理由は、全く当時も今もありません。

先ほど言いましたように、16時36分にもう既に官邸対策室はできています。もっと言えば、震災、津波については、本部も立ち上がっています。もう地下の危機管理センターは全閣僚あるいは全省庁が地震、津波の対応では、もう既に集まってきておりました。ですから、それに重なった形で組織をつくることに当然なります。そういう意味で、特に何かここで遅らせたということはありませんし、逆に言えば、19時3分に発令して設置したことで、何か必要な作業が遅れたということも、私はなかったと認識しています。

○質問者　そうしますと、海江田大臣が来られて、もう少し詳しく状況が把握できないと了承できないだとか、あるいは制度についてもう少し詳しくわからないと宣言できないとお考えになったわけではないということですか。

○菅前総理　全くないです。

【取扱い厳重注意】

○質問者　どうぞ。
○質問者　与野党会議のことであれですけれども、そもそも目的はどういう目的の与野党会議だったのでしょうか。
○菅前総理　こういう大きな問題が起きたときに、与野党で緊急の話をするというのはよくあるというか、やらなければいけないことなんです。特に今回の場合、政治的な問題ではなくて、事故ですからね。地震、津波があったわけですから、それに対して、まず野党の皆さんにも、その時点でわかっている実態をお伝えすると同時に、協力を要請する。今の議院内閣制というのは、与野党で議会を構成しているわけですから、そういう趣旨です。
○質問者　つまり、総理としてお伝えになった中身については、どんなお話をされたんでしょうか。
○菅前総理　先ほど言いましたように、私自身、事細かに中身は覚えておりませんけれども、今、申し上げた趣旨のことを言ったはずです。つまりは、大地震が起きて、大津波が起きていると。そういう中で、これは大変な事態なので、党派を越えて、与野党で協力して事態に当たっていきたいので、是非御協力お願いしたいと。まず、間違いなくそういうことを言っていると思います。
○質問者　原発炉自体が、言わば緊急事態宣言を発するような厳しい状況にあるんですというところまでのお話はされたんですか。
○菅前総理　どこまで原発のことについて発言をしたかというのは、記憶にありません。私自身がその時点で、それほどに詳しい状況はまだ説明を十分に受けていませんし、わずか5分間という中で、逆に言うと、先ほどの御質問にあったように、言わば党首会談が予定されていたものですから、短時間行って戻ってくるという前提で出ましたから、そういう全体の話は、協力要請はしたと思いますが、状況については、細かい説明を私自身が知っていることも少なかったし、また、時間的にもそこまではできていないということです。
○質問者　わかりました。
○質問者　緊急事態宣言を発令されまして、19時3分から第1回の原子力災害対策本部の会合があるわけですけれども、この時点での総理の御認識ですが、電源が落ちたということで、非常用電源、ディーゼル発電機についても止まっているという御認識だったわけですね。
○菅前総理　つまり、全交流電源、全電源が喪失ということは、当然そういうことだと思います。つまりは、一般の電源が喪失したときに、備えてディーゼルのでかい発電機が置いてあるわけですから、たしか後の経緯で言うと、それが一旦動いたと聞いております。それが津波によって海水をかぶって止まったと。そこで全電源喪失が起きたと。それで10条の通報を出したという認識です。10条は15時42分に来ていますから、私にもそういう事態が起きたことは伝わっていますから、当然もともとの電源に加えて、非常用電源が稼働しなくなったという意味内容は理解していました。
○質問者　注水の状況ですけれども、非常用給水システムで水は入っているという御認識

だったということでしょうか。あるいはそれがどのぐらい続くかとか、そういうところについては、御認識はございませんでしょうか。

○菅前総理　私も原子力は理系の一般的な原子力の講義を受けたことはありますが、原子炉の講義とかは受けたことがありません。ですから、後になってICとかアイソレータとかサプレッションチャンバとかいろいろな話は出てきますけれども、私が知っているのは一般的な電源があって、いざというときには緊急用の電源があって、それで何とかなるんだというところまでは知っていますが、それに加えてどういう大きい電源でないもので動くものがあるんですというのは、少なくとも誰かが説明してくれれば別ですが、説明がされないのにそこまでわかっているかというと、そんなことは私は知りません。ですから、非常用電源が切れたときに、ではどうすればいいんだということになったんです。それで、その後に続くわけです。

つまり、東電から電源車を一刻も早く送ってくれというか、自分たちも準備するからと言われたので、それが最も重要だという話だったから、全面的に協力しますよということで、後の話を申し上げたので言いますと、あとは何か詳しいことがわかりましたけれども、それが届けば、少なくともいわゆる一般で言うディーゼルの大きい非常用電源ではないが、炉のまさに緊急用の冷却機能を動かすことができるから、とにかくそれを一刻も早く届けてくれというのが、その後続いた東電からの最重要課題だったんです。少なくとも、その時点の説明では、それさえ届けば当分は、それは何時間だったんですが、大丈夫だという話だったので、それで私はそれに最優先という課題だということで指示を出したんです。当然、陸上で運ぼうとすれば渋滞ですから、警察の協力が要るし、早く運ぶには、場合によってはヘリコプターで運ばなければならない。それも知らせました。自衛隊と米軍にも頼みました。よく私はその寸法云々ということを他のあれで言われますが、つまりは、寸法が云々というよりも、一刻も早く運ぶことがその時点では最大の緊急課題だと東電も言っていたし、私もその説明を受けて、そう感じていました。それでいろんなやりとりの中でちょうど私が電話をもらったときに言われたので、では早速それで持っていけるのかと聞いたら、ヘリコプターには乗れませんと言われました。

ちょっと話が先に行きましたけれども、そういう意味で、先ほどの話に戻れば、大きいディーゼル発電機が止まったというところまでは、そういうものが存在するということは一般的に知っていましたが、それから後のことは、東電とかいろんな説明の中で理解して、必要な指示を出したということです。

○質問者　そうしますと、11日の夜の段階では、その電源車の確保というのが最重要課題で、それに向けて一生懸命段取りをしていたということなんですね。

○菅前総理　そういうふうに、東電がそうしてくれと。東電は、勿論電源のことは一番わかっていると思いますから、彼ら自身も、例えば新潟にあるとか、あるいは東北電力にあるとか、いろいろなところにあるのを彼ら自身も勿論、自分の東電管内にあるもの、あるいは近い東北電力にあるもの、あるいは場合によっては、自衛隊とか米軍等にあるもの。

我々がやったのは、東電が直接やりにくいようなところについては、こちらでいろいろ聞きました。運ぶ手段も聞きました。それはこちらで重要性を判断したのではなくて、今、いましたように、全電源が喪失した中では、電源車がとにかく一刻も早く来てくれて、それをつなぐことができれば、一定の冷却機能が維持できるからということに対して全面的に協力したということです。

○質問者　そのころの事態についての認識ですけれども、もし電源車とか電源の確保ができなかった場合に、どのぐらい持ち時間があって、何時間ぐらいまでに調達できないと炉心溶融とかそういったことになるんではないかみたいな、そういう御認識は何かございましたでしょうか。

○菅前総理　ですから、先ほど言いましたように、私が事前に認識があったかということは、事前にそういうICとか2号、3号の何とかとかというものがあったということは、私は知りません。ただ、東電からそれが来れば、一刻も早く、言われたのが夕方ごろでしたから、本当なら9時、10時ぐらいに持っていきたかったわけですが、結果的には10時か11時ごろの最初の1台が届いたのがそのぐらいになったと思いますけれども、ですから、それが届けば、後になってみればICなのかもしれませんが、それが稼働するのではないかとか、あるいはICでなかったかもしれません。2号、3号も並行していましたから、2号、3号とも型が違いますから。だから、そういう意味で、そのときに何時間どうなるかということは、事前には全く私はわかりません。

○質問者　そうしますと、電源車が焦眉の急という認識で東電から説明を受けているわけですけれども、その電源車が結局行ってもつなげないとか、その後、電源回復ができないとかという話に変わってくるわけでしょうか。

○菅前総理　そうです。

ですから、話をもう一回戻すと、一般的な意味で冷却が止まればメルトダウンが起きるということは私は知っていました。ただ、一般的に大きい電源がなくなった。そこでそれに代わる電源ということで、それを持ってきてくれればという言い方は変ですが、それが届けば何とかなるという話だったので、それに対して、その時点ではそこに電力を送付したということです、この問題では。

一方で津波とか地震もあるんですけれどもね。

○質問者　恐らくそういった状況がまた変わってくるんだろうと思いますが、その変わってくる辺りの経緯を知りたいわけですけれども、その電源車が届いてもなかなかつなげないとか、電源回復ができないという話に変わってくるんだろうと思うんですが、それが時間的に大体いつごろのタイミングなんだろうかということについて確認したかったわけです。

○菅前総理　ですから、届いたんですよ。届いた時間についても、後になって、こっちからも届いた、あっちからも届いたと。大体20台か30台あちこちに行っていましたからね。

頭の中で記憶している時間というのは、正確には覚えていませんが、ある段階で届いた

ということを聞いて、私だけではなくて、そこにいた何人かが、これでよかったと喜んだ記憶はあります。

しばらくして、これでうまくいくのかなと思っていたら、プラグが合わなくてつなげませんというので、これも電力会社が電源車を持ってきてくれと言って、持ってくると。プラグがつなげる、つなげないなんていうのは、私も何でそんなことになるんだろうと。結果的には、それが理由、あるいは更には配電盤を後に見ると、配電盤も海水につかっていたということがあって、いずれにしても、結果としては到着した電源車が当初、東電が言っていたように、電源として生きて、そういう冷却機能が動くということにはならなかったということは、その後の報告で知りました。

○質問者　済みません、細かなことで恐縮ですが、電源車について、東電からの要請だとおっしゃいましたが、これは総理のところへどういうルートでいわゆる電源車というもの、言わば非常に実務的な話が何で総理のところに直接上がってくるのか。その経緯をお聞きしたいと思います。

○菅前総理　多分、私が直接聞いたのは、武黒フェローだったと思います。というのは、その近くにいませんから。

○質問者　ほかの主要な閣僚等がいらしたと思うんですけれども、そういうところからの話ではなくて、直接総理にお願いしますという話が来たんですか。

○菅前総理　多分、そこには経産大臣も一緒だったと思います。

つまりは、当時の物理的なことを言いますと、先ほど言いましたように、一旦 14 時 46 分に官邸地下の危機管理センターに入るわけですが、その後、16 時 58 分に記者会見をしていますし、先ほどのように 18 時 12 分から党首会談をしています。こういう場合は、後の危機管理センターから出ています。

そういう中で、早い段階では、地震、津波の危機管理と同時並行ですので、危機管理センターの中で両方やらなければいけない。[redacted]その中で話がなかなかしにくいものですから、しかし、当初は全員がそれと両方ですから、それで地下の大きいオペレーションルームといいましょうか、そこから見れば、ちょうど中二階みたいなところに、どこか部屋はないかと言ったら、小さい部屋があって、その部屋に原発関係の人間が集まって、かなりの時期まで、そこにいれば両方が見られるということでやっていました。そのときには、東電、原子力保安院、安全委員会、多分経産大臣、官房長官も出たり入ったりで、あとはいろんな副長官とかですね。この電源車の問題は、その場で聞いたと思います。ですから、それは一緒に聞いているんです。私が個別に聞いているのではなくて。

○質問者　今のはよくわからなかったもので、そういうお話を総理が直接されるのは奇異に感じたもので。

○菅前総理　ですから、地下にある危機管理センターというのはかなり大きいです。その

間では、原発だけの議論はできませんので、その小さい部屋で大分長時間いました。
○質問者　わかりました。
○菅前総理　だから、そのときには、今、何回も言いましたように、小さな部屋ですけれども、[redacted]少なくとも私と経産大臣と、先ほど言った東電、原子力安全委員会、原子力保安院。だけれども、原子力安全委員会がもっと早くから聞いて、つないでくれるならつないでくれてもよかったんです。

ただし、私の理解では、その場で聞きましたから、東電からこういうことの要請が来ているというのを直接に武黒さんから聞いたか、それを聞いただれかから聞いたかは別として、一緒の場に言わば東電の代表もいるわけですから、一緒に聞いているわけです。
○質問者　わかりました。
○質問者　ところで、実際に電源車をそういうところから借りるとか、行くという作業を具体的にどういうふうに危機管理センターの人たちと総理なり、総理の周りの方がおやりになったのかというのはちょっと関心があるんですが、具体的には実際に20台ですか。たくさん集まったというのは、危機管理センターに来ている各省のいろんな人にやってもらって、そして具体的に何台ぐらい集まって、どうなったということを総理なり、周りの方がモニターしているというか、ちゃんとやれよということでやったのか。そこら辺の具体的な電源車を集める作業というのはどうなったのかということがちょっと気になるんです。
○菅前総理　全体像は私にはわかりません。多分、当然まずは東電が自分でやっていたと思うんです。例えば第2サイトもあるわけですから、もしあるとすればあそこから持ってくるでしょうし、当然、東北電力とのつながりも彼ら自身があるわけですから、まずは東電でやっていたと思うんです。だから、我々がやったのは、どちらかというとフォローです。つまり、運ぶときは警察が緊急車両扱いしないといけないとか、そういうつもりなんです。

ただ、結果として、今、何時にどこを出たとかという情報が警察とか何とかに入ったということです。ですから、それは勘違いしないでください。やっている主体は東電自身なんです。もともと本来は東電が用意しておくべきものなんです。それから、隣の何とかにもあったのではないかとか、いろいろ後になって言われています。5号機、6号機とか、あるいは消防だ何だとありますけれども、ですから、そういうものがどこにあるかというのは、当然ながら、少なくとも私は知りません。各役所も一般的にはそんなには知りません。どんな種類の電源車かと。東電が運ぶと、運びたいということに対して、それは全面的に協力しましょうと。それらが警察であったり、ヘリコプターだから、自衛隊、米軍という。そこは東電がさすがに直接米軍に頼むとかということはしにくいでしょう。そういう意味なんですよ。

電源車というものは、私も一般的にはどういう電源車かなんてわかりませんからね。あくまで一刻も早く届けたい。ちょっと言葉が悪くなるとすれば、一刻も早くどっかから調達したい。だから、それについては必要なことは政府として全力を挙げて協力しますよと

いうことで対応したということです。
○質問者　秘書官室のところにホワイトボードがあって、電源車がどうなっているかということをモニターしておられたということを聞いたものですから。
○菅前総理　ですから、当然ながら、とにかく一番早く着くことを我々は願っていたわけですよ。一番早く着くのは、どこが一番早く着くんだと。それがヘリコプターなのか何なのかということで、一番早く着くことが一番重要だという認識は、当事者である東電も勿論言っていましたし、我々もそれはある段階から共有していたということです。
　例えば新潟から来たものがあったり、どこかの高速道路から乗ったとか、警察の情報が入りますから、そういうことです。別にそれ以上の、我々が一番そのことをその時点では重要だと思ったからです。ちょうど早く行かないと津波が来て、早く行かないと流されてしまう人がいたときに、どうやってそれを助けるかというときに、一番早くそこに届くようにするのはどうすればいいかということをだれか言いますね。警察なり、自衛隊がやるのを。それがちょうどそういう時点で関係していれば、いつ着くかなということは、一番関心を持つのと同じように、この場合は原発事故がメルトダウンにつながるような重大事故になるかならないかの境目だということはわかっていましたから、その境目において、どういう形で東電の期待どおり車が着くのか、着かないのか。率直に言って、相当の渋滞だったので、苦労したようです。
○質問者　電源車の要請は、下ではなく上の執務室で要請があったというお話があったんですが、[redacted]。
○菅前総理　乗った後ですね。
○質問者　電源車も増えるので、[redacted]ここで説明している頃、東電の皆さんとか。
○菅前総理　もっと早い段階ですね。
○質問者　上の５階ですね。
○菅前総理　そうですね。いずれにしても、だから、今、言ったような趣旨は変わらないです。私たちが運ぼうとしたというのではなくて、向こうとして運びたいと。それには協力してくれというので、それは何でも協力しますよと。
○質問者　では、続きますけれども、話の流れからしますと、電源車は着いたんだけれども、プラグが合わないので役に立たないということで、どうすればいいかということで、ベントの話に変わったというお話でしょうか。
○菅前総理　論理的にそうかどうかはわかりません。電源車が届かないということと、ベントということは。
○質問者　別問題なんでしょうか。
○菅前総理　別であるかどうかも含めて、よくわかりません。後になればもっと、あの時点では、ICが動いていたという認識をしていたり、水があるという認識をしていたり、いろいろなことが出てきますから、ベントについて私が理解しているのは、まさにこれも同

じことです。東電がベントが必要だということを言ってきたということです。その理由としての説明は、格納容器の圧力が上がってきたからだということでした。

くれぐれも、こちらがベントが必要だということを判断したんではないですよ。

○質問者　時間的な前後としては、電源車の方が話が先で、その後にベントが必要という話が東電から出てきたという理解でよろしゅうございますか。

○菅前総理　少なくとも、電源車の話があったのは非常に早い段階なんです。夕方の比較的早い段階です。ベントの話が出てきたのは、多分内部ではやっていたんだと思います。ただ、きちんとした説明がここにあるのは、翌日12日の午前1時30分に経産大臣同席の下、東電及び原子力安全委員長が1号、2号のベントの必要について説明をしたという記録が残っています。多分、その前にもう東電の中では、いろんなところでは、圧力とか何とかの関係で議論がされていたと思うんです。

○質問者　ベントの手順とかについては、例えば何か具体的な説明がどこまであったかはわかりませんけれども、すぐできるような説明だったのか。それともなかなか手間がかかるような説明だったのか。その辺はいかがでしょうか。

○菅前総理　私はその手順までは、その時点で聞いたことは全く覚えていません。というか、ベントが必要だと東電が言ってきているんですから。ただ、ベントというのは外へ出ますから、その当時はウェットベントで、出る量は極めて少ないという説明も受けています。だから、それでも少なくとも外に出ますから、ということは、外の人に対して影響が出ますから、これはやはり本部長としては、その影響を考えれば避難の問題にも関連しますので、説明を受けるのは当然だと思います。

ただ、その手順がどうとか、炉のオペレーションのことは、我々は当然知りませんから。

○質問者　それから、格納容器の圧力が上がってきたのでベントしなければいけない、圧力を抑えなければいけないわけですけれども、その上で何をするかとか、それだけでいいというわけではないでしょうが、電源車はなかなか役に立たなそうだということで、ベントをした上でどうするかだとか、その上で注水をするとか、水を入れるとか、消防車が給水するとか、そういう説明はなかったのか。それとも、そこまでの御認識はなかったのか。その辺りについてお伺いしたいと思います。

○菅前総理　認識がなかったというのは、私がですか。説明する人がですか。

○質問者　総理の御認識です。

○菅前総理　説明がなければ、私はそれはわかりません。だけど、早い段階でそういう説明を受けていません。ですから、それがないのが困ったんです。つまり、今の事態がわからない、あるいは想定でもいいから、今の事態がもしかしたら、何々としたらこれが必要だとか、こういう状態だったらこういうことが必要になるということが普通だったら出てくるんですよ。そういうことが出てこなかった。ベントで言えば、ベントが必要だと。それは圧力が上がってきたからだと。だけど、ウェットベントだからそれほどたくさんは出ない。ぎりぎりどうしましょうと。それで関係者に全部聞きました。原子力安全委員会、

原子力安全・保安院、勿論当事者にも。やはり、格納容器が圧力でぼーんといったら大変なことになる。若干のことがあってもベントをやらざるを得ないと。それはみんなが一致しました。ですから、そういう方針でやってくれということを言ったんです。

○質問者　とてもそこで疑問に思うことがあるんです。

菅首相がわからないでいるということが一番その時点では困ることだとしたら、安全保安院のどこでもいいんですけれども、原子力を本当は所掌している責任者というのは、菅さんが理解できるように説明するのが、多分一番大事な仕事だと、外の私たちだとそういうふうに理解するんですが、どうも先ほどからの話を伺っていると、そういう動きが全くないままずっと事が進行しているように見えるんですが、それは先ほどから言っておられる事態がつかめない、それから、わかるような説明がないというお答えがずっときているのですが、そういう中身というのは、結局、正確に知ろうとしても把握ができないような状態に置かれたまま、いつも決断を求められていったということなんでしょうか。

○菅前総理　ざっくり言えば、そういうことです。

ある段階から少し、いろんな担当者がいますから、さっき言っていた３者。例えば原子力安全・保安院で言えば、最初の院長。その後、平岡さんという人が来ました。原子力の専門家ではないけれども、電気の専門家等々が来ました。その後、安井さんという人が来て、この人は本物と言ったら変ですが、原子力の資格を持った人です。多分、２日か３日。その辺りから話は非常に、私だけではないですよ。

○質問者　ほかの人もみんな。

○菅前総理　ほかの人もそばで聞いていて、この人はわかっているんだなというのがわかるわけですよ。ですから、私も別に文系の人でも構わないですけれども、それならちゃんと原子炉のことを説明できる人と一緒に来てくださいと言ったんです。なかなかそういうところまで行くのに、そういう意味では、原子力安全・保安院の人で言えば、安井さんが来て、みんなやっと少しこのことが理解できるような説明になっていたと。

○質問者　細かいことですけれども、時系列的な進展の状況といいますか、総理の中での危機感の進展状況なんかもできればお聞きしたいものですから、細かな質問かもしれないんですけれども、12 日になりまして、１時 36 分ぐらいに下から執務室の方に上がられているようなんですが、大体その時点での福島の 1F についての危機的な危機感の強さということなんですが、ベントができれば、それでとりあえずは収まるという御認識だったのか、それとも、これは相当な重大な事故等にもつながる可能性が高いという危機感がすごく強いという状況だったのか。それはいかがでございましょうか。

○菅前総理　それは最初の全電源喪失の時点から、まして、その次の冷却機能が停止していたということは重大事故だと思っていまして、もともと 10 条、15 条というのは初めてですし、しかも複数ですから、だから、ベントというのは一旦圧力を抜くためのベントですから、ベントをしたから何か解決するというのではなくて、一種の緊急避難ですから、それでも物事がどうこうとは思っていませんでした。

先ほどの話にちょっと戻ると、結局、後のことにもつながりますが、ベントが必要だと言っている東電がなかなかやらないので、まだやっていないんですと言うから、何でやっていないんですかというときも、説明がないというのが一番困るんです。現場に来ている武黒さんだったと思うんですが、わからないと言うんです。必要だとみんなで相談してやりましょうと。やってくださいと。なかなか進まない。何で進まないんですかと言うと、わからないと。結局、それが後につながる。どこかでコミュニケーションが、例えば現場がこういう理由で時間がかかるというなら、その理由がわかればいいわけですが、やりたいと言っていて、やってくださいと言ったら、やれない、やらない、理由はわからない。そういう状況なんです。

それが後のことにもつながりますけれども、それは保安院だけではなくて、今、言った東電のことも、結局来ている人と現場と間に本店というのが入っていますから、これはわかりませんが、当時本店にはまだトップ２はいません。これは後になって私も知るわけですが、どこでどういう判断がどうなっているかというのは、私から見えるのは、東電で言えば、その時点まで来ている武黒さんを通して全部私には来ていましたから。

○質問者　それから、時系列的な確認なんですけれども、翌朝といいますか、12 日の朝に 1F の方に視察に行かれるわけですが、視察に行くとかという御指示というか、行きたいということをいつごろから言われたのかということですが、11 日の遅くの時間になり、12 日未明ぐらいから視察に行くというお話をされていたというお話もあるものですから、大体どのぐらいの時点で視察に行きたいということを考え始めたのか。いかがでしょうか。

○菅前総理　大体私が検討を指示したのは、12 日の午前１～２時ごろに検討を指示しています。私として行った方がいいと自分なりに判断したのは、勿論地震、津波の状況を、これはある程度画像では見ていましたけれども、やはり現場を上空からでもいいから見たいというのは当然ありました。

それともう一つは、先ほどのことにつながって、つまりは、福島原発の状況がなかなかコミュニケーションがスムーズにいかない中で、やはり一度現場の責任者ときちんと会って話をした方がいいと私なりに判断しました。

○質問者　その時点のころから、伝言ゲームになっていて、なかなかよくわからない、状況認識ができないという御認識があって、それでやはり現場に行きたい、行かなければいけないというお気持ちになったと。

○菅前総理　はい。

それと、これも後と重なりますけれども、それが一般的な形であると思ってやったわけではないんです。一般的な形であれば、今の仕組みは、それはオフサイトセンターがやることになっているんですよ。オフサイトセンターに関係者、政府で言えば経産省の副大臣が行き、保安院がそれに専門家がついて行って、そして地元の市区町村あるいは県と東電、安全委員会がそこで判断するというのが今の仕組みなんです。

ですから、現地対策本部がそういう機能を法律が予定したように、そういうものとして

機能していれば、そこから案が上がってきて、それを最終的に本部長としての私が、多くの場合は、そこまできちんとした議論があって上がってきたものについては、わかりましたということにする。そういう仕組みになっているわけです。

しかし、現実には、オフサイトセンターが、少なくとも11日段階では全く動きません。12日に入っても、一応関係者が集まれる状況ではありません。ですから、意図したというよりも、結果として、官邸にそういうメンバーが集まってきていた中で、経産大臣もいますから、原子力安全委員会の委員長もいますし、保安院の院長もいますから、事実上そこがいろんなことを判断せざるを得なくなったといいますか、だれも判断しなかったら、もっとおかしなことになりますから、そういう状況です。

そういう中で、先ほど言ったように、本来なら、そういうことは総理がやるべきことなのかどうかというのは、私も、一般的な視察は別として、原子炉について云々ということまでやるのが一般的に総理の仕事だとは今でも思っていません。しかし、その時点でだれかがそういうきちんとした情報のやりとりがあって、しかも、それがそれなりの判断ができる、例えば原子力安全・保安院の院長ができる、あるいはそこの責任者が現地に行っている。後で聞いたら、現地に原子力安全・保安院の人はいるわけですけれども、そういうものが全部機能して動いていれば、必ずしも行くという判断はしていないと思います。

そういうことが機能しない中で、何もしないか、私自身が行くか、どちらがいいかと私なりに判断して、行った方がいいと私は判断して、それと地震、津波の状況を自分の目できちんと把握したいと。その２つの目的で行きました。

○質問者　今、お話が出ました冒頭のオフサイトセンターが機能していない、機能不全だということについては、どの時点なり、どなたの説明報告なりで把握されたかは御記憶はございますでしょうか。

○菅前総理　というよりも、オフサイトセンターが機能しているのであれば、何らかのことが上がってくるはずなんです。私に対してオフサイトセンターからこう言ってきていますとか、ああ言ってきていますというのは一切ありませんでした。

○質問者　それから、先ほどの視察のお話の方に戻りますけれども、１時、２時ぐらいの時点では、検討を指示したということですが、最終的に視察に行こうと判断されたのは、もう少し後の時点ですか。

○菅前総理　直前です。もう６時ごろ出発でしたので。もともとそういうつもりでした。いつでも行けるようにしておいて、ぎりぎりの状況で。というのは、その間でも何が起きるかわかりませんから、地震、津波の方もありますし、原発についてもありますし。

たしか地震が起きたのはもう一つ地震が起きましたね。長野で地震が起きたのは。

○質問者　3時51分です。

○菅前総理　12日午前3時59分に長野で地震が起きていますね。本当にいろんなことが重なって、ですから、一応準備はするけれども、最終的な判断は調整するということで、もともとそういう段取りでした。

○質問者　わかりました。

視察についてもいろいろな評価なり意見があると思いますので、よく確認しなければいかぬと思うわけですけれども、そのうち直接総理が行かれるのではなくて、ほかの例えば補佐官に行ってもらうとか、あるいは海江田大臣に行ってもらうとか、そういう代わりの人に行ってもらうという選択肢というのはお考えにならなかったわけですか。

○菅前総理　一般的にはいろいろな選択があったと思いますが、私が直接行った方がいいだろうというのは、最終的には私の判断です。

理由を言えと言えば、ないわけではないんですけれども、やはり多少の土地勘は、つまり、ここはなかなか表現が難しいんですが、決して私は原子力の専門家ではありませんけれども、放射性物質を使った実験ぐらいは学生実験でやったことがありますから、多少の土地勘はあるわけです。それから、余り若い人にはお勧めできない場所でもありますから、逆に何かだれかに行ってやってもらうよりも、多少の土地勘があって話をすれば、ある程度、話は一般的な意味では普通の文系の政治家よりは理解できる私自身が行った方がいいのではないかということも併せて考えたことは考えました。

だから、一般的に役職でだれかということもありますけれども、一番大きく言うと、やはり一番大変だったのは、地震、津波という物すごく大変なことに対する対応と、それから、まさに刻々と変化する原発事故というものとの両方なんです。当然ながら、総理は両方なんです。そのときに、どうしても地震、津波の方については、今日の話題ではないかもしれないけれども、私が一番最初に指示を出したのは自衛隊です。それは阪神・淡路のときに自衛隊の出動が遅れたという認識がありました。当時、私も先々にいました。ですから、これだけは急ごうと思って、北澤さんに言って、それは迅速に出てくれて、ほかの業務をやりました。

こちらの中心は当時の松本防災大臣が中心でやってくれました。こちらも勿論重要なんですけれども、原発の方が非常に、先ほど言ったように、いろんな事象が、しかも、私にとってもですけれども、一般の政治家にこの範疇を越えた冷却機能がどうとかという話ですから、そういうことがあったものですから、多少、私と官房長官の中では、全体は官房長官を中心に副長官とか何とか。ある部分で原発については、やはり私が、前のめりだとかいろいろ言われましたが、自分の中で常にフォローをしておるという気持ちはありました。

○質問者　端的に言いますと、ベントがなされれば、線量は別にしても、若干被曝したりするおそれもあるわけですけれども、そういったリスクを含めても行った方がいいと。特に自分が行かなければいけないのではないかというお気持ちだったと理解してよろしいでしょうか。

○菅前総理　それはもう、そこで実際に収束作業をやっている皆さんがいるわけですから、そういう皆さんが現場でやっている中で、やはりしかるべき人間がちゃんと話を聞くというのは重要だと。若干のそういうことがたとえあるにしても、ないにしても、やることは

やらなければいけない。
○質問者　ベントの話の方に戻らせていただければと思うんですけれども、ベントがまだできていませんというか、ベントができていないという話をお聞きになったのは、時間的には大体何時ごろの話になりますでしょうか。
　時系列のことを言いますと、1時36分に執務室に上がられまして、朝の5時31分に危機管理センターの方に戻ってこられているんですけれども、その後ぐらいにお聞きになったという感じでしょうか。それとも途中で降りて行って聞いたという感じでしょうか。
○菅前総理　結局、ずっとできていないわけですよ。ですから、どの時点で最後に聞いたという風にはないわけですけれども、午前5時31分に地下センターに行った辺りで聞いていただろうということは、今、考えると、そういう段階だったかなと思います。
　ただ実際には、その後ももっと前も行うようにという経産大臣の方から指示とか命令も出ていますから、ある意味では、結果的には言ってもできていなかったということですね。
○質問者　この時点でベントができていないということが、視察に行こうということに、影響したとか、やはりそれは行かなければいかぬという気持ちに影響したとかということは何かあるでしょうか。
○菅前総理　私としては、先ほどから言っているように、一番重要な問題は、現地の責任者というか、きちんとそういう人たちと話し合い、コミュニケーションができないと、つまり判断ができませんから、そういう意味では、それが最大の目的です。ベントがどうなっているという状況にかかわらず、基本的に現地の責任者とちゃんと意思疎通したいというのが最大の目的です。
○質問者　視察につきましては、枝野官房長官が政治的リスクがあるのではないかということを御注進申し上げたということをおっしゃっていますけれども、そこの御記憶はございますでしょうか。
○菅前総理　どういう程度の言い方だったかは別として、一般的にそういうリスクがあることは私自身も理解していました。これは常にあるんです。これはかつての阪神・淡路のときも、私は今でも覚えていますけれども、あの当時の法律体系は、国土庁長官が責任者です。偶然ですが、私と同じ選挙区の方が自民党の国土庁長官だったものですから、早く行くか行かないか、やはり行ったらいろいろ邪魔になるというか、迷惑をかけるのではないと、逆に行かなければいけないということから、いろいろなことがあったことは、阪神・淡路の場合でも私は見ていました。だから、常に両方あると思っていました。
　ですから、必ずしも官房長官がどの程度強く反対したのかというのは、そんなに私に意識がないですが、当然そういう意見があるのも、いろいろなことを配慮する立場から当然だと思っていました。最終的な判断は、私が背負うものだと思っていました。
○質問者　言われなくても、そういう意見はあり得るということですか。
○菅前総理　十分あり得ます。
○質問者　ありがとうございます。

次の項目の方に変わってしまうのですが、時系列の進行に合わせて避難の方の指示といいますか。

どうぞ。

○質問者　総理が現地視察を判断されたということで朝、行かれたわけですけれども、結局、別の方がおっしゃっておられて免震棟に入られたときに、作業員がたくさん来られたと思うんですが、引用しますと「何で俺がここに来たと思っているんだ」ということをおっしゃられたということなのですが、どういう意味でおっしゃられたのか。ですから、今の現地のやっている担当者との意思疎通を図りたいという意味の御発言だったのか教えていただければと思います。

○菅前総理　率直に言うと、それを言われたのは池田副大臣なんですが、若干私の意図と勘違いを。私の意図はですね、ヘリコプターを降りまして、バスで免震棟に入って、免震棟の入り口は二重ドアになっていますから、入ったらすぐに何か知らないですけれども、そこにいた人に並んでくださいと言われたわけですよ。並んでくれと。だから、私も一瞬何か手続があるのかなと思って並んだら、だんだん前の人がいなくなって、私が一番前に行ったら、こうやって一生懸命、簡単に言うと計測するわけですよ。ですから、私はそんなので来たんではないんだと。所長に会いに来たんだと。だから、一般作業員と一緒になっているわけですよ。そういう場面です。

○質問者　わかりました。そういうコンテクストですか。

○菅前総理　ですから、私は彼の書いたものを読みましたけれども、私も行くまで、その建物がそういう作業員がたくさんいるなんて勿論知らないわけですよ。会議室が何かある、あるいはどこかと思っていたんですが、実際に会議室はあったんですが、入った途端に並んでくれと。並んだら、そういう列の後ろでこうやられたものですから、ちょっと待ってくれと。そういう一般の作業員が作業をして、帰ってきて、線量を測っているということで来た仕事ではないんだという意味で言ったんです。それをちょっと彼は離れていて、何か私がそこでまた怒鳴って何とかしたとか言っていましたけれども、私の趣旨は、まさにそういう物理的状況なんです。

○質問者　その部屋に入られて、小部屋で。

○菅前総理　それは２階だったんです。２階に行けと。どこに行けばいいのと聞いたら２階だと言うので、２階へ行く廊下も一種の疲れ切ったような人がたくさんいました。階段を上がって、部屋に入って、部屋に入ってほんのしばらくして、たしか吉田さんと武藤さんが入ってきたんだと思うんです。

○質問者　そのときの御感想というか、非常に秩序がないというか、現場ですから、非常に戦場みたいな感じだったのではないかと思うんですけれども。

○菅前総理　それはある意味当然だと思うんです。大変な中なんだなということを改めて感じました。まさに最前線というか、現実にそういう人たちがだあっといるわけですから、大変な中でやっているんだなということは物すごく感じました。

○質問者　今、現場の話が出たのでお尋ねしたいんですけれども、菅さんが去年の８月19日付の『週刊朝日』でインタビューに応じてお話になっていたのですが、その中で指示がしっかり当事者に伝わるか否かが大事だから、そこを直接確かめておきたかった。中でも第一原発の吉田所長と会って話したことは、後々非常に役立ちましたとお話になっているんですけれども、吉田所長とお会いになったのが後々役立ったというのは、どういう役立ち方だったのか、どんな意味を持つのか、いかがですか。

○菅前総理　私は、その場で初めて吉田さんという人に会ったんです。私は東電の人とのつき合いは余りないものですから、勝俣会長とは経団連の関係では知っていましたけれども、ほとんどの方は固有名詞でおつき合いした人はいなかったし、吉田所長もその場で初めて会ったんです。後になってみると、同じ大学の同窓だということがわかったのですが、その場では全く知りませんでした。

その場に来られたのは、私の記憶では、所長と武藤副社長で、吉田所長がベントについて今こんな状況だとか説明して、お願いしますと言ったら、わかりましたと言って、やりますと言って下さったわけです。

そのやりとりの中で、この人はちゃんと話、コミュニケーションがきちんとできる人だという感じがしました。それはさっき言ったこととも戻るんですけれども、武黒さんももともと技術屋だとは聞いているんですが、彼自身の責任であるかないかは別として、先ほども言ったように、ベントのことで言えば、やってくれと言っていて、やれない理由が話せないとか、わからないわけです。つまり、そういう意味では、直接話をしたら、少なくとも説明の中身は納得できましたので、この人となら普通の話ができるなということを感じて、その後、私や経産大臣であったり、場合によったら、補佐官だった細野補佐官なりが、何度のときにはどの程度の数をやったか知りませんが、吉田所長とも連絡を取っているし、私も直接に連絡をする、私自身が電話を回すことはありませんが、一、二度はそういう間をとってつないだこともありました。

ですから、それを特別なことというよりも、説明がきちんと我々に、少なくとも私にとっては、合理的な説明があったということです。それが大きく言えば、15日の撤退問題とか、次から次にいろんなことが起きていましたから、そういうときにどうするというときに、やはり率直に言って、東電というのは本当にわかりにくい組織です。技術的なこと以外の判断が入っているのか、入っていないのかがわからないんです。後で聞けば、海水注入などもいろいろおもんぱかるんです。後になってわかるんですが、役所みたいなところですから。役所以上に役所みたいなところがあります。

ですから、私が知りたいのは、技術屋さんだったら、純技術的に説明してくれればいいわけです。それ以外のことはまた別の人に聞けばいいわけですから。金がかかるけれどもどうしようかとか、何とかどうしようかという話は、また別に話をすればいいんですけれども、そういう意味では、吉田所長というのは、私の感覚の中では非常に合理的にわかりやすい話ができる相手だと。それを、私も２、３人ですか。大臣とか補佐官に伝えて、コ

ミュニケーションができたと。それが後々のいろんな展開の中で非常に役に立ったと思います。

○質問者　先ほど来のお話ですと、官邸におられて、保安院にしろ、安全委員会にしろ、あるいは東電にしろ、みんな幹部がおられずに、一向にらちが明かない説明になっているといけない。そういう流れの中で、初めて納得できる説明をしてくれる人に会ったという印象ですか。

○菅前総理　東電で言えば、そういうことですね。

それから、原子力安全・保安院は、先ほど申し上げたようなことです。

原子力安全委員会の班目委員長というのは、私は、ある意味でのまさにプロなんです。個人的な評価は余りしにくいんですが、あの方はやはり自分の世界がある人ですよ。だから、だれかに言われて論を曲げたりするような人ではない。自分の世界がある人ですから、自分の考え方は非常にはっきり言われます。それは言われない人に比べれば断然よかったです。言わない人ばっかりなんですからね。班目さんは言いました。結果として、それは水素爆発の見通しは間違っていましたけれども、少なくとも格納容器に窒素が入っているから爆発は起きないとちゃんと見解を言われました。ほかは言わないんですからね。言えないというか、言わない。これは天と地ぐらい差があるわけです。

ですから、全部が全部同じように何かだめだったというのとちょっと違うんです。東電は、先ほど言ったように、武黒さんが悪かった、よかったはわかりません。何かの理由で彼のところに情報が入らなかった可能性もありますし、彼自身は多分ダイレクトに吉田所長とやっていなかったんでしょう。だから、多分本店のだれかとやって、それがもしかしたらだれかに聞いたり何かして、よくわからなかったかもしれません。これはあくまでも推測です。

とにかく、彼が目の前にいて、私は東電を代表している人だと思っていましたから、いろいろ聞くけれども、ここはだから技術的というよりは、東電の意思決定が悪かったんです。だから、保安院は内容自身がわからなかった。あるいは幹部のスタッフはわかっていたかもしれません。班目さんは班目さんで、まだほとんどあの時点では、原子力安全委員会が班目さん１人がおられるぐらいで、直後ですから、サポート体制が必ずしもできていませんでした。ですから、それぞれ事情があったことは、私なりには推察できるのですが、今、柳田先生が言われたように、東電で言えば、やはり吉田さんに会って、まともにちゃんとコミュニケーションできる、特に技術屋さんとしてできる人だったなという感じでした。

○質問者　とても大事なところで、総理の意思決定をするに当たって、情報がどれだけあるかというのは非常に重要で、現地に行って吉田さんに会うとわかるんだけれども、武藤さんが言っても、武黒さんが言っても、そういう納得感が得られないという、東電の情報の流れというのが根本的な原因。それを吉田さんならちゃんと判断しているのに、なぜそれが本部である官邸まで伝わってこないのか。ここの問題点はどのようにお感じになられ

ますか。

○菅前総理　非常に逆説的ですけれども、15日未明に本店に行ってみて、ある意味で何だと。何だというのはいい意味で、全部あるわけですよ。各サイトと24時間つながっているテレビが。そこでしゃべっていることは、全部お互いにいい意味で筒抜けなわけですよ。だから、多分、吉田所長と東電の間は、少なくとも情報は十分行き来していたはずなんです。私が現場の東電本部に行ってみて。ですから、あそこに我が方から細野とかみんな入って、みんなツーカーですから、隠しようがないぐらいにツーカーなんですよ。だって、一人ひとりが電話をしているのではなくて、マイクでやっているわけですからね。だから、やはり1つは何か東電はそういう、そこの理由は100%はわかりませんけれども、現場に来ている武黒さんに十分な情報を提供していなかったのではないでしょうか。

それから、吉田さんというのは、勿論個人としての性格なりあれもあると思いますけれども、法律上は彼に権限があるんです。よく言うんですが、私の理解では、船で言えば艦長、飛行機で言えば機長のような役割です。法律上もそうなっています。ですから、原発の炉に関しての危機に対しての対応は、最終的には現場の責任者。これで言うと、炉の責任者は所長ですね。実はそういう権限もあるんです。ですから、そういう意味では、そういう権限を持っていて、そういう知識を持っている所長が、それに基づいて話をしてくれた。

だから、私のいろんな理解で言えば、それがストレートに伝わってきた。そこに別の経営上の判断とか、何とか省の判断とかではなくて、まさに原子炉の状態とその危険性についてストレートに話を、少なくとも御本人が知っていることについては、それでやってくれたんだろうと思います。それが私にとっては非常にわかりやすかったということです。

○質問者　今の言葉を、コミュニケーションができたできないという話であって、今のような話になってしまうけれども、多分、菅さんと吉田さんとの間の会って話をするという中身の大事さというのは、会って何回かやりとりをするだけで、頭の後ろ側にある価値の置き方とか、物の考え方が共有できている部分というのは、それこそ一遍にお互いがある種わかり合った部分があって、それがとても大きな安心感のような、信頼感みたいなものをつくったのではないかという感じが脇で聞いているとするんですが、どうなのでしょうか。

○菅前総理　でも、会ったのはそのとき初めてで、その後も半年ぐらい経ってから会っているだけで、そう何回も会っているわけではないですよ。今までまだ2回しか会っていないかな。そこの感想が私も当事者だから言いようがありませんが、私からすると、ごく普通なんですよ。聞いていることについて真正面から答えてくれる。だから、わからなかったら、わからない理由を言ってくれる。これは私は判断できませんとか、これは情報が届いていませんとか。だから、先ほど言ったように、武黒さんとだったらそういうことにならなかった理由が、彼個人と私の相性にあったというよりも、多分彼のところには、今になって思うのは、彼も若干言っていますけれども、自分のポジションについてとまどった

みたいなことを最近言われているのを読んでみると、結局、東電本店がきちんと現場の状況も含めて、私というか、経産大臣もいるその席に伝えるという任務をきちんと与えて、それに対するフォロー体制をつくって送ったという体制がなかったのではないでしょうか。だから、必ずしも個人とだけは言えません。組織としてそういう任務にふさわしい体制をつくらなかったんでしょうと、東電が。

最初の最初は確かに大変なんですよ。起きてから2時間、3時間で、4、5時間ですからね。ですから、よく言われるのは、15日の撤退問題が起きるときも、武黒さんは全く知らないわけですよ。彼自身は。だから、そんなことを知らないということもこっちは勿論当時は知らないですけれどもね。

そんなところですかね。

○質問者　そもそも最初の法律上の建付は、東電がその事象が発生したときの報告は、もともとは原子力保安院に報告して、保安院から官邸に流れるということだったと思うんです。

○菅前総理　保安院ということは、経産大臣でしょう。

○質問者　はい。

したがって、武黒さんも最初に呼ばれたときに、何で呼ばれたのかなと。本来はそういうことなのに、何で官邸から呼ばれたんだろうという疑問を持っておられるところもあるんですが、その中では、建付がこうなっているんだけれども、しかし、こういう危機状況なんだから直接こっちにやれとか、その辺りの整理みたいなものはなかったんですか。

○菅前総理　私からすれば、整理するのであれば、普通は原子力安全・保安院がいるわけですから、責任者が。これはこういうことになっていますという説明があって、それについてどうしましょうと。あるいはオフサイトセンターが本来はやるべきだけれども、機能しないから臨時的にどうしましょうということが、もしあれなら、安全委員長でもいいし、あるいは経産大臣でもいいですが、あったとすれば、それはそれで相談したと思います。

ですから、こちらとしては、とにかく本部長ですね。これは法律的になってしまうわけですから、原災本部の本部長になって状況を聞きたいというのは当然ですね。その間がどうなっているかというのを聞きたいと。そのときに、ここはあれになっていますから、大臣が聞いて後で報告しますということがあれば、それでも1つのやり方だったと思いますよ。先ほども言うように、今回が私は通常の予定された状況だったとは私自身も思っていません。ただ、そういうことができてこないというか、できていない中では、経産大臣も来ていましたから、そこで説明をしてもらうというのは、私からすれば自然なことだったんです。

○質問者　では、先に進ませていただきます。

1Fの視察から戻られたのが10時47分ということになってございますけれども、その後は官邸の方で執務とかをされていまして、1号機についてはベントの状況の報告とかを書いていると思うんですが、その後、午後になりまして、15時36分に1号機の爆発という

事象が起きるわけです。１号機の爆発のときには、公明党との党首会談の最中だったと聞いておりますけれども、総理が爆発の事象を認識されたのはどういうタイミングなり、どういうきっかけでわかったんですか。
○質問者　これは全体ではないですか。３号機。
○菅前総理　このときは野党全員がたしかそろっていました。
○質問者　失礼しました。
　では、１号機の爆発を認識されたきっかけといいますか、状況といいますか、そこをお伺いできればと思います。
○菅前総理　ですから、15時から与野党党首会談で全党首が集まられていました。その途中であったわけですが、その時点では、会談の途中には、私には情報が入っていません。何か一時期メモが入ったんではないかということを他の野党も言われましたが、それは関係のないというか、このことではないメモでして、この時点では入っていません。
　その後に、テレビで報道があったんですね。それもいろんな段階があるようですが、全国放送で言うと日テレが報道したのが４時49分だったとだれか言っています。ですから、会議が終わった後に何か起きたということが伝わってくるわけですが、正式に東電なり、保安院からの報告は大分後になってからです。
○質問者　テレビの報道の後で。
○菅前総理　テレビの報道の後だったかな。テレビの報道も大分後なんですけれどもね。
○山崎局長　何か白煙が上がっているという話はあったんですけれども、実際にテレビでその後に出ていたのを。
○菅前総理　結局、私が直接見たのは、日テレが報道したときに見たわけです。ですから、それまでは白煙が上がっているとか、何かぼーんという爆発だったのかどうかというのもはっきりした形で上がってこなかったんです。テレビを見たら、明らかに爆発ですから、それをだからテレビで見たときに、はっきりと爆発だということを私自身も認識しました。
○質問者　当然、一体何が起きたんだと。どういう原因なんだという話になるんだと思うんですけれども、水素爆発ではないかとかいう話がわかってきたのはいつごろの時点といいますか、何時ごろになってから。時間のことはまた細かな話かもしれませんけれども、大まかにで結構ですが、いつごろになってわかったかということはいかがでしょうか。
○菅前総理　このときにちょうど班目さんと一緒にテレビを見ていたんです。あの爆発の仕方というのは、勿論それは原発本体が爆発すればもっとすごいことになっているでしょうけれども、水素爆発の可能性が高いわけですから、最初の段階で水素爆発のことがちょっと気になったものですから、班目さんには聞いていたわけです。そのときは、それはありませんと。彼は後で格納容器のことだけが頭にあったからという言い方もしていましたけれども、格納容器には窒素が入っているので、水素爆発なんてありませんということを言われていたので、そういうものかなと思っていたんですが、結果的には起きたわけです。ですから、私としては、これは起きないと言っていたけれども、やはり水素爆発が起きた

んだということを画像からはそう感じました。
○質問者　そうしますと、それに対する対応になりますと、状況把握、原因把握と国民に対する公表をどうするかとか、その辺りになるわけでしょうか。
○菅前総理　ですから、同じことの繰り返しになるんですけれども、まず起きた事象についての説明がなかなか来ないんです。それは現場自身が後で聞きますと、私はサイトの中にモニターのテレビぐらいあって当然だと思うんですけれども、それが何か福島テレビが撮ったのが唯一だとか、だから、サイトの中でさえドーンという音は聞こえたけれども、だれかが帰ってくるまではわからなかったとか、それがそういう形で本当に事前に来たのかわかりませんけれども、つまり、起きたことが１時間なり、１時間半後にテレビで放映されてさえ、その事態がどういう事態であったかという説明がないし、その説明がないということは、それに対してどういう対策があるかということも提案がないし、簡単に言えば何もないんですね。

私も、爆発が起きたということは、テレビを見てわかったけれども、当然、ほかのところでも起きないようにとかという一般的なことはわかりますが、それに対してどうするということを私が考えるということまではとてもいきませんから、まずは一体どういうことが起きたんだということを当然聞くんですが、何か方法があって、ではこれからどうするんだと。この辺りからです。これからどうするんだということが何も提案がないんです。事態の説明も不十分。まして、これからの予測も不十分です。

ここの時点とは違いますけれども、割と早い段階からセカンドオピニオンということで、個人的には一部の人と電話で意見を聞いていました。勿論、現場の状況を知らない人ですから、一般的な話ですけれども、一般的な話としては、後で来るでしょうが、いろんな事象の話を聞いていました。だけど、一番の私自身の足元の３つの組織から上がってくる話は、今、言ったような状況でした。
○質問者　そういう状況の中で、その後、１号機の対応について出てきた話というのが、例の注水についての話になるのかなと思うんですけれども、夕方ぐらいに注水についての話があるようですが、この話が起きてきたというか、注水の話になったいきさつというか、どんな経緯でその話になったのかというのは御記憶でしょうか。
○菅前総理　それは、若干私も、そのときに初めて聞いたこと、あるいは考えたことか、後になってそうだったということが若干混同していますけれども、今の時点で一番注水が必要だったと思っています。やはり１号の注水が始まらなかったのは、水があるという認識なり、ICが動いていたという認識があったのではないでしょうか。

ですから、注水についてあのところの事象をいろいろ当時も言っていたんですが、簡単に言えば、何段階か報告が来ていますけれども、ある時期は水位が不明なんですが、ある時期は水位が改めてわかったときに、燃料棒より上にあるんです。上にあるという報告が何回か来ているんです。

だから、ICのことは、私も当時はそんなに細かいことまで聞いていなかったと思うんで

す。水位は当時、リアルタイムで何回か聞いています。ですから、プロの皆さんからすれば、冷却ができなくなれば直接水を入れるしかないというのは、多分基本的な認識はあったと思うんです。常識だったと思うんです。ただ、それが１号も２号も３号も結果として遅れているんです。それは、１号については、まだ水があるという認識。２号、３号はどうも動いていたようですけれども、冷却機能は動いている。さあ入れようかと思ったら、ドーンとあって、なかなか入らなかったということです。

ですから、水を入れるということについては、私がということではなくて、冷却機能が動かない中では、もうあとは水を入れるしかないというのは、その道の専門家からすれば、当然の認識だったんだと思います。ですから、どの時点でそういう話が出てきたかというのは、ちょっとその辺りは、いろいろ記録を見ていると、かなり早い段階から注水について現場は指摘しているんです。記録によるとですよ。ただ、そんなところまで私にいちいち、その時点で勿論相談も来る筋合いのものではありませんから。ですから、どの時点でどういう議論があったというのは、必ずしも時点までは私も認識の中ではっきりしていません。

○質問者　そうすると、関係するかもしれないと思うことは、17 時 45 分に海江田大臣が海水注入の指示をしていまして、その報告なりのときに海水注入をしていいかどうかという議論になったのかなと思ったりするんですが、その辺のそういう経緯なのか、それともそうでもないのか、その辺はいかがでしょうか。

○菅前総理　ですから、いわゆる海水注入の問題は、その前に淡水注入が行われているわけですよ。ですから、水を注入するということについては、たしか言ったのは、その更に前から本当はあってよかったんだと思います。それは私が今この時点で言うべきことかどうかはわかりませんが、だから、この記録を読むと、淡水注入が一応０時 52 分にまず 1,000 リットル入ったと書いてありますね。ですから、淡水注入が何回かあって、それから海水注入の話になっていくんだと思います。

海水注入については、淡水がなくなれば海水を入れるしかないという認識は全員一致していました。勿論、私もとにかく水を入れることしかないわけですから、当然だと思っていましたし、経産大臣も 17 時 55 分に海水で満たすようにという命令書を出すという指示をしていますね。

○質問者　特段、そうしますと、総理のお気持ちの中で、海水注入について何か問題があり得るのではないかとか、危険があり得るのではないかという問題意識があったわけではないわけですね。

○菅前総理　つまり、注水が最も重要だという認識は、ある段階から強く持っていましたから、だから、動かなくなりますよ。冷却機能が動かなくなれば、水がなくなれば当然注水しかないわけですから、そういう意味では、その淡水がなくなったら海水になるというのは当然だと思います。

同時に、海水のときに何が起きるかということは聞いていました。現場から聞いていた

か、ほかの時点から聞いていたかは別として。つまり、海水をずっと長い間、注入し続けると、どんどん蒸発しますから、蒸発量に対して、御存じのように３％が塩分ですから、塩が固まってくると。それが金属などに長期的にというか、影響するとかという専門家の指摘はありました。ですから、そういう意味での淡水があれば、淡水の方が、そういう塩分が析出しませんからいいわけですけれども、淡水がなくなったときは、緊急的に海水を入れるのは当然だと思います。

よく再臨界のことが言われるんですけれども、再臨界と海水の問題は考え方は全然別です。当時、再臨界のことで聞いていたのは、メルトダウンしたときに、メルトダウンしたものの形状によって再臨界が起きやすい形状と起きにくい形状があるわけです。どてんと固まると起きやすいわけです。平たくなったり、ばらばらになっていると起きにくいわけです。そういうのがありますけれども、海水であるかないかということは、私の認識では別の話です。それで、そのときに聞いたのは、再臨界についてもその場で聞いたら、班目さんが、可能性はゼロではないと。これは国会でもそういうふうに自分で言ったと言われていますから、最近何か別のところではまた別のことを言われているようですけれども、それで何回か確かめたというか、聞いている人もいますが、議事録が残っていますが、御本人も国会にもそういう答弁をされています。

ただ、私の中では、海水の問題と再臨界の問題は、あえて言えば、入れる水であっても、海水であっても、ホウ酸か何かを入れれば再臨界の可能性は止められるわけですから、そういう間接的なことはありますけれども、海水に変えたから変えなかったからということとは関係ありません。

○質問者　皆さん関係者の方にもヒアリングをしているんですが、皆さんそれをつなげてしまっていて、海水を注入したら再臨界の可能性はないのか、危険ではないのかということで総理もお聞きになったということ。

○菅前総理　だから、それは多少技術のわかっている人は海水の話と関係ありません。水と海水で再臨界がしやすくなるなんていうことは、私の知識の中では全くありません。あくまで。

○質問者　むしろ形状といいますか。

○菅前総理　それが形状なんです。もっと一般的に言えば、再臨界にならないようにするためにホウ酸を用意しているわけですから、それはメルトダウンした後の形状のことを今ちょっと言いましたけれども、例えば燃料棒の間に入っている制御棒が何かで壊れたり、何かで抜け落ちたりしたときは、また再臨界が起きますから、そのときに水の中にホウ酸が入っているかないかというのは物すごく重要ですから、中性子を吸収するわけですからね。ですから、それは水と海水でそれに関して差があるかないかなんていうことは、私はそこまでは聞いたことはありません。ですから、全く別の話です。再臨界が起きる場合にそれを防ぐためには、その後もたしかホウ酸を入れたはずですよ。海水を入れ始めてしばらくして、ホウ酸を入れているはずです。

○質問者　再臨界の可能性があるかないかで一旦議論が中断になって、総理入れが中断になって、１時間ぐらいしてからもう一度再開したという流れだと皆さんおっしゃっているんですが、余りそういう御認識でもないですか。
○菅前総理　ですから、何度も言いますように、武黒さんだったと思いますが、準備に時間がかかりますと。１時間半あるいは２時間かかりますということをいろんな人から聞いています。だから、１時間ないし２時間は、どちらにしてもまだ準備ができていないから、水が入らないという説明があった。その中でいろんな議論をしていたんです。その中の議論なんです。ですから、当然準備ができれば、海水を入れるというのも当然のこととして、その時間があるなら、例えばホウ酸を数回入れられるのか、とりあえずは海水を入れておいた後に入れるのか、その必要はないのかということの判断をしてくれという趣旨だったんです。
　だから、中断したというのは、どちらにしても、まだ始まるのに時間があるからということだったので、それまでの間にということだったんです。だから、武黒さんは現地の状況を正確には伝えていなかったわけですね。ですから、後で気がついてみたら、中断がそんなに２時間かかるというよりも前にスタートしていたわけです。
○質問者　武黒さんの説明だと、官邸での議論で海水注水の了承が得られていないので、ちょっと待ってくれないかということを吉田所長に連絡しているらしいのですが、そうすると、官邸での議論の認識についても武黒さんの説明は不正確ということになるわけですか。
○菅前総理　私はよくわからないですよ。武黒さんというのはプロだと聞いていますから、何で海水注入のことと再臨界のことをごっちゃにしたのかということはよくわからないんです。彼も原子力の専門家ですから。
○質問者　済みません、途中で。
　何度も御説明でわかるようなところもあるのですが、班目委員長に海水の問題と再臨界の可能性ということについて、言葉として、あるいはどんな流れの中でそういう話をされたんでしょうか。そこがちょっとわかりにくいんです。
○菅前総理　それのためだけの会議を開いているのではなくて、しょっちゅういろんな、先ほどのベントの話もそうですし、やっているわけですよ。ですから、私の認識では、先ほども言いましたように、武黒氏の方から１時間半ないし２時間あるという前提の中で、だから、どこまで塩分の話も出たかどうか細かくはわかりませんが、先ほども言いましたように、塩分だって長い間やっていれば塩は固まるというか、析出しますから、そういう問題がどこまで議論になったか詳しくはわかりませんが、そういうことは現実にあります。
　それから、ホウ酸を入れるかどうかという議論もあっても不思議ではありません。ホウ酸というのは再臨界を防ぐためですから。ですから、少なくとも班目さんも、武黒さんも、私よりはよほど原子力のプロですから、それが全然別のことだということはわかっているんではないですか。

○質問者　周りは海水注入と再臨界の話を結びつけたみたいな形で動いているように見えるんですね。
○菅前総理　ですから、私がわからないんですよ。そういうことに対して、私よりよっぽど原子力の専門家ですから。あくまで、水なりを入れるときに、簡単に言えば、再臨界の問題は、ホウ酸を入れるか入れないかという話なんです。一般的にホウ酸を用意しているんですから、だから、私が詳しいのではなくて、私はわからないから聞いたんです。そういうことも考えなければいけないんですかと。私が聞いたんです。
○質問者　総理の形状によって。
○菅前総理　ちょっとごっちゃになりました。
　形状はメルトダウンの後の話で、もしかしたらごっちゃになったと思います。
○質問者　ですよね。後の話ですから。
○菅前総理　メルトダウンの後です。
○質問者　今の海水のときには、まだその段階にはなっていないわけですね。
○菅前総理　少なくともなっていないという認識です。
○質問者　そういうメルトダウンの状況へという総理の当時の知見は。
○菅前総理　それはちょっと前後しているかもしれません。
○質問者　いつごろからお持ちになっていたんですか。
○菅前総理　ですから、ちょっと前後しているかもしれません。これは12日ですからね。まだ直後ですから、その後、メルトダウンについてのいろいろな議論があったときに、いろんな人に聞きました。
○質問者　今のことと絡むかどうか知りませんけれども、総理の御記憶で、東電が政府にお願いしたいことの中に、非常に純水というか、質の高い水が欲しいというリストがあったんだそうですが、これは何だということで、つまり、淡水をやって足りないのに、海水だという議論をするときに、そんなリストがあるのかということで、変だなと思われたことがおありなのか。
　つまり、東電が、できれば海水はできるだけ延ばしたいという要請があったのかどうかですね。そういうことを感じられたことはありますか。もうしようがないこれはということで、東電も動いていたのかと。
○菅前総理　私はそのリストとか何とかというのは、今、そのままでは記憶は特にないです。ただ、たしかメガフロートで水を運ぶみたいな話はありました。ただ、それは一般的な話ですから。これは緊急時ですから、水がなくなれば海水しかない。その流れで言えば。
○質問者　躊躇しているという印象は全然お持ちにならないですか。
○菅前総理　その時点で私はわかりませんでしたけれども、少なくとも、私の目の前で感じていることは、そんなことで抵抗したというのは、私の目の前ではありませんでした。私には全くありませんでした。
○質問者　では、次の質問に移らせていただきます。

【取扱い厳重注意】

海水注入の話はそのぐらいにさせていただきまして、翌日が13日になりますが。

○菅前総理　ただ、1つだけ言っておきますと、先ほどの話にちょっと戻りますけれども、いずれにしても、水を注入していたんですよ。水を注入しているのが海水に変わるわけですよ。海水に変わって、もう経緯は御存じだと思いますが、たしか19時何分かに注入が始まっているわけですよ。それで、武黒氏は、つまり、東電の中のやりとりの中で、19時4分に始まったということも、武黒さんもその時点では知らなくて、勿論、我々にも報告がなくて、それで我々はその次の会議で決めて入れることになったと、その後まで理解していたわけです。それが大分経ってからわかってみたら、19時4分に入っていて、それを入っていることを知った武黒さんが、自分の判断で、官邸がまだそういう事前の報告をちゃんと聞いていないという彼の判断で、彼の判断で直接か間接かは別として、吉田所長に止めろと言っているわけですよ。そうでしょう。それで吉田所長は、止めちゃまずいと思ったけれども、官邸の私の指示だったということで、一応止めるぞと言って、実は止めなかったと、そういう判断をしたわけですよ。私は、結果よかったと思いますけれどもね。

そういう東電の中の、私から言うと、言わば伝達ミスというか、誤解というか、あるいはおもんぱかりというものが、率直に言って、物すごく私に対する当時の批判になっているんですよ。予算委員会でも言われたんです。私が止めて、それで水が止まって、それでメルトダウンしたんだということを大物政治家までが言うわけですよ。私には全く分からなかったんです。だって、止めろと言ったことは一度もないし、動いたのはもっと後だと思っていました。後でわかってみたら、その今のような原因で、勿論止めろとも言っていない。それから、入ったのは19時7分。それで、実際は水は止まってもいない。それは結果オーライなんですけれども、ただ、そこの誤解を生んだところが、私からすれば、それは東電の中の話です。我々が関わりようがない話です。もし一言、気がついたら海水が入っていますけれども、それはいいですかと例えば聞かれたら、当然それを止めるなんてありえませんからね。そこだけは何か向こうの中のおもんぱかりが、何かこちらの判断であったかのように、いまだに報道でごっちゃになるんですよ。そこだけは是非。

○質問者　その点は理解しておりますが、ただ、武黒さんがそういう忖度をするような何か前提がその話の中であったのかなかったのか。つまり、先ほどの海水を入れると再臨界云々という話と結びついて忖度されたようにも思われなくもないんですが。

○菅前総理　ですから、私もわからないんです。武黒さんが、社長が言ったのなら、まだ変な言い方だけれども、武黒さんは原子力の専門家ですよ。だから、原子力の専門家が水を入れることの重要性をわかっていないはずは普通はないと思うんですよ。当たり前ですけれども、私は専門家ではありませんから。だから、私は最初、清水さんが言ったのかなと思ったんですよ。でも、どうも武黒さんが言っているようだと。だから、よっぽどあの会社は技術ばたけの人までがそういう技術の判断をしていなくて、ほかのことをやっているとしたら、それは忖度という言葉が私から言うと、若干技術屋のちょっぴり端くれですから、技術屋はちゃんと技術で判断してくれなきゃ、その技術を曲げてまで、だから、吉

田さんは、私は法律的にも正しかっただけではなくて、やはり原子力の専門家として、これは入れなければ危ないと思ってやったというのは、私は立派だったと思いますよ。それを何かこう言うと官邸がこう言うかもしれないから、こうだと言ったとしたら、それはそこが一番問題ですよ。やはり東電の体質ですよ。しょっちゅういろんなことで首が飛んだり何かしていますからね。

○質問者　まだ質問事項はたくさん残っているのですが、2時間ほど経ちましたので、休憩をとった方がよろしいかと思いますので、10分ほど休憩をとらせていただきます。

（休　　憩）

○質問者　3月12日の夕方までの話をお聞きしたわけですけれども、翌日の13日以降の話になります。

13日には東芝の関係の方をお呼びになって、いろいろ協議されております。また、13日には3号機の状況が大分悪くなってきておりまして、水が入らないとかという状況になってきていると思うんですけれども、この辺の状況をお伺いできればと思います。

○菅前総理　たしか1日違いで東芝と日立の両方にお願いしたんです。簡単に言えば、原発をつくったのは、多分1号炉は日立だと思いますが、一般的に日立、東芝が原子炉をつくる会社ですし、いろんな意味で事故に対するサポート、場合によっては人を出すことや技術的なことも、それは意見をちゃんと聞いた方がいいだろうというアドバイスをしてくれる人がいて、お願いして、それぞれ社長が来て下さってます。

○質問者　具体的に、どういう項目についてアドバイスをもらったのかといいますと、どんなことですか。

○菅前総理　基本は協力要請だったんです。東電自身からとられたかもしれませんが、人の問題等いろいろありましたから、やはり他の電力会社のとおりですが、原発をつくったところにもちゃんと協力要請を私の方からも、つまり、国としてもしようということでやりました。たしか東芝の佐々木社長は原子力の出身だったと思いますね。

どの程度まで細かい話をしたかということは、全部頭にはないんですけれども、ある程度いろんな話をしたと。水素爆発の可能性とか、そういうこともしたと記憶している人がいて、詳しい方ですから、それをやった可能性はあります。

○質問者　メーカーの方は、13日、14日だけでなくて、その後も継続的にアドバイスとかをもらったりしているのでしょうか。

○菅前総理　私がお願いしたのは、そのときだけです。

ただ、一般的には、いろいろ人を出したりするのに協力はしてくださったと思います。

○質問者　わかりました。

その次が、14日には3号機が爆発するという問題がありまして、時間が11時ぐらいだったわけですけれども、これは爆発の可能性があるということは、1号機が既に爆発して